

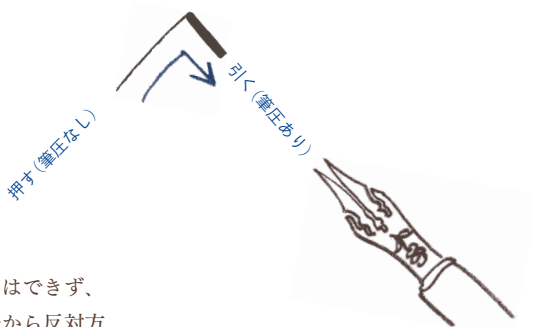
線がガタガタ？ 初心者にとってはごく普通です。この段階では、抑制するか、勢いで書くかです。早く書くと線はなめらかになりますが、正確に書きづらくなり、ゆっくり書くと、方向や形に注意を払っても、線が揺れ気味になります。これは経験と練習で改善されるので、自分のスキル向上に時間をかけてみてください。

コーヒーを飲みすぎたか、ただ疲れているからかもしれません。

筆圧のコツ

次に、筆圧を均等に増やしていきましょう。ペン先が広がり流れでるインクが増え、線が徐々に太くなります。これがスウェルストロークのつくり方です。いくつかのバリエーションを練習して、慣れましょう。筆圧を徐々に抜いていくことで線が細くなっていきます。

ここで気づかれるのは、もうあらゆる方向に無理なく進むことはできず、直感的に自分に向かって引いているはずですが、筆圧をかけて自分から反対方向に押しと、ペン先が紙に引っかかり、インクが飛び、最悪はペン先が折れます。これがポイントドペンの基本の技法です。ヘアライン（筆圧をかけない）はあらゆる方向に書けますが、スウェルストローク（筆圧をかける太い線）は、引くことしかできません（通常は上から下か左から右、もしくは左利きであれば右から左）。



以下は、なぜ私がほとんどオブリークホルダーで書いているのかのもうひとつの理由です。ストレートホルダーを普通のペンの持ち方で使うと、ペン先は約60度ほど左に向きます（人によって角度は少し違っても、同じくらいだと思います）。そうすると、ほとんどの書体で太い線を引く際に、やや変な角度になります **1)**。ストレートホルダーで全力の筆圧をかけて太いダウンストロークを書くと、起伏のある線になります。線の左側がなめらかでも、ペンの右の歯を引きずるので線の右側がでこぼこになります **2)**。オブリークホルダーは、それを補い、ペンアングルを調整し、自分に向かって縦にダウンストロークを引いても、スウェルストロークの端はなめらかです **3)**。

ところで、ペンの歯が紙の上でうまく均等に滑らないとできる起伏のある線は、必ずしも悪くはありません。自由な書体のバリエーションの中では好んで使うこともあります。でもカッパープレート体などの伝統的な書体では、なめらかな線がよいです。

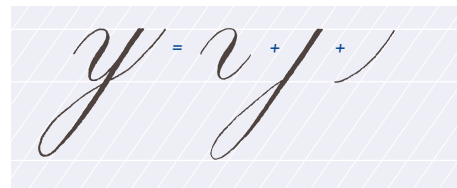
ペン先は左や右に傾かず、紙に対称的に置きましょう。まずはインクをつけずに試すと確認しやすいです。

小文字 y

コンパウンドカーブ、ディセンドラー・ループ、そしてエグジットストロークを組み合わせて書きます。

練習ヒント y はとてもシンプルな文字です。直面するかもしれない問題をお見せします。ループの幅が広すぎる上、高すぎる位置で閉じてしまうと、コンパウンドカーブとループが衝突します。

y の練習として *yippih* と書いてみましょう (今は y で始まる単語だけで、途中や最後に y がある単語を書くのは後にしてください)。



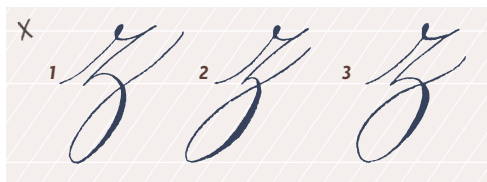
ディセンドラーがある小文字 z

ディセンドラーがある z の書き方はいくつかあります。18 世紀の書き方の本の中で最も頻繁に見られるのは、右の z です。p.68 に説明してある通り、上の部分を書き、小さいコンパウンドカーブの代わりに、ループの書き始めをほんの少し右に上げることで尖頭をつくります。ディセンドラー部分に向かってきれいな丸みのあるループをつくり、上に戻った線がベースラインの下で交差します。文字からはヘアラインで出ましょう。

このループは新要素です。左右とも優雅なカーブで (通常のディセンドラー・ループとは違う点)、スウェルは右側です。

練習ヒント ループはほぼ傾斜を囲むように書いてください。うまくいかない理由は 3 つあります。1) ループの位置が右すぎるので、傾斜が立ってしまいました。2) ループの位置が左すぎるので、今度は右に傾いてしまいました。3) ループが大きめでウエイトが上半分に偏っています。結果として、バランスが悪くなりました (すべてのループを大きめに統一するのは OK です)。

この新しいループを別々に練習し、形に慣れるのがよいかもしれません。そして *zip* と書いてみましょう。異なる z を交互に使い、繰り返し書いてみるのもよいです。



深い練習 1) モダンな z の書き方は、スペンセリアン体 (p.199 参照) からヒントを得ています。オーバートーンと同じように書き始めますが、書き終わりのストロークを左に寄せてから、(半楕円形を書くように) ほぼ横向きの小さいループを書いて方向転換します。それから上で説明したようにディセンドラーを書いてください。2) 上のバリエーションを組み合わせることもできます!



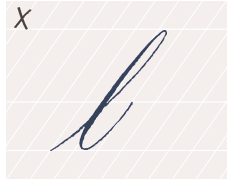
ループするl

もうひとつのlの書き方です。ループがないlよりも装飾的に見え、スペースを必要とします。アンダーターンで終わるアセンダー・ループの前にエントリーストロークがついただけです。

エントリーストロークを書く動きの結果としてループができたように書きましょう。実は、アップストロークを少し屈曲させるとうまくいきます。その部分はダウンストロークで覆われて見えなくなります。

練習ヒント ありがちな失敗で文字の比率がおかしくなることがあります。下のように一筆書きで書くと（普段の手書きのように）、エントリーストロークとステムが合う位置が低すぎる結果、ループが長くなり、全体的に幅が狭くなります。上の「見えなくなる屈曲」について、読み直してください。それ以外は、難しい文字ではありません。文字の細部で問題を感じる場合は、

p.54にあるループの説明と p.58のシンプルなlについて確認してください。練習では、シンプルなlとループするlを交互に書いた後、単語に移りましょう。till, tilt, lull。両方のlを組み合わせてみて、文字の見え方がどう変わるか注目してください（下の例も参照）。



"The kink is in the link"（ザ・キンク・イズ・イン・ザ・リンク—つながるところでねじれる）はイギリスのカリグラファー、ポール・アントニオの言葉ですが、このストロークの書き方が覚えやすくなるかもしれません。

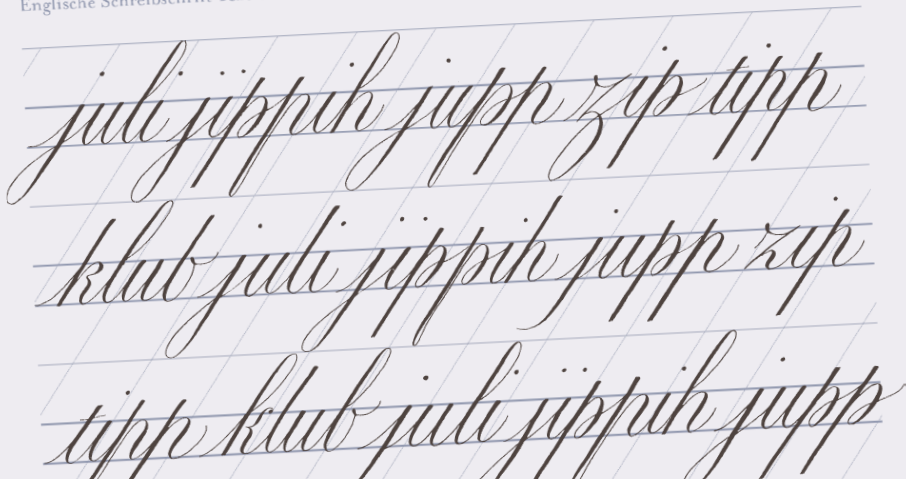


深い練習 ラウンドハンドからのチャーミングな小文字lには、大文字のように小さな足があります（大文字よりずいぶん小さいです）。ループの後にアンダーターンを書かず、左に向けて繊細なカーブをつくり、ベースラインでミニループを書いてください。最後は波状の横線を上に向かって書き終えます。こちらを使う際は読みづらいことも考慮に入れることをお勧めします。

単純な単語を使って、異なるlの使い方を見せます。



Englische Schreibschrift Texttraster — 8 mm Mittelhöhe, 3:2:3-Ratio

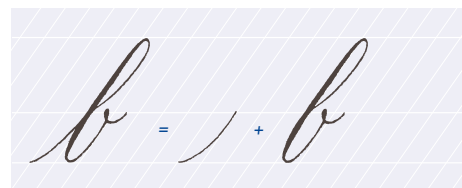


ループするb

ループする**l**を書き、p.61の**b**のように書き終えます。

練習ヒント ループを書き始める位置が低すぎて突出しないようにしましょう。このようにループとショルダーが衝突しやすくなります。ループを書き始める場所はエックスハイトのちょうど上です。

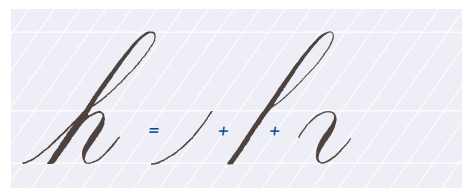
blubという単語を書く練習をしてください。ここでも、アセンダーの長さや形を左の **lulu** の例のように変えてみましょう。



ループするh

シンプルな**h**の書き方とまったく同じですが、ステムの代わりにアセンダー・ループを書きます。

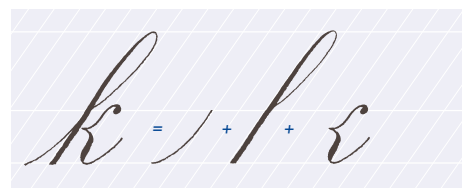
練習ヒント 必要に応じ、p.54のアセンダーループについて、およびp.63のシンプルな**h**についてのヒントを読み返してください。bと同じく、ループを書き始める位置が低すぎないように気をつけます。まずはループがある**h**を単独で練習してから、**hub**、**hut**、**hit**と書いてみましょう。



ループするk

p.63と同じカーブブラケットを使うか、こちらのバリエーションも可能です。こちらは、上の部分はティアドロップ（雫型の点）から始まり、波状のカーブがステムに触れる寸前まで左に向かいます。尖頭をつくって方向転換をし、最初の形の**k**と同じくアンダーターンでブラケットを書き終えます。

練習ヒント **k**につくティアドロップは、茎の先のさくらんぼのように見えてはいけません。反時計回りに極小の円形を書いてから成形してください。その他については、ループについてのヒント (p.54)、シンプルな**k**についてはp.63を読み返してください。単語の練習には、**kit**と**klutz**と書いてみましょう。ブラケットの形やアセンダーを変えて練習するのもよいです。



小文字 f のバリエーション

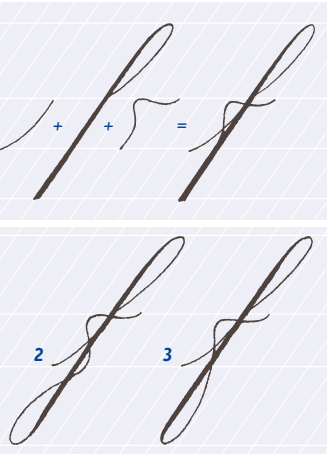
小文字 f は、初めて（そして唯一）ガイドラインの「3階」すべてを使うだけではなく、いくつかのバリエーションがすでに18世紀の最初の手本に記載されていた文字です。基本の形は、長いステムとループを横線が交差します。

1) 下を単独のステムで書き終える最もシンプルな f は、現代のカリグラフィーでは滅多に見かけないようです。でもいくつかのディセンドラーが衝突しそうな単語の中や（例えば *giffaff*）、もしくは同じループが何度も繰り返され面白味に欠けている時に使えます。2) アセンドラーとディセンドラーのループがひとつの文字に使われています。交差する線は、ディセンドラー・ループから上に伸ばして書きましょう。3) ディセンドラー・ループを左ではなく、右に書きます（新要素）。こちらのバリエーションのほうが、クロスストロークが書きやすいと思います。

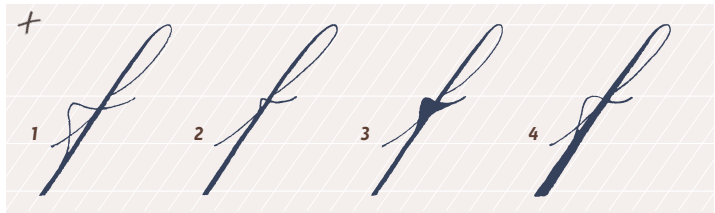
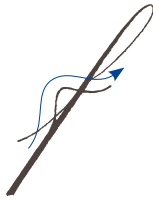
練習ヒント すべてのバリエーションを今すぐ練習して覚える必要はありません。バリエーションをご覧いただき、ご自分のお気に入り、もしくは書きやすい f を見つけてください。レパートリーを広げるのは後でもかまいません。

いずれにしても、まずは順番に練習してみましょう。新しいディテールも考慮しなくてはなりません。クロスストロークが難しい場合は、単独で練習してください。これは常に下から上に向かう、ゆるやかな波状の線ですが、いくつかの「落とし穴」があります。

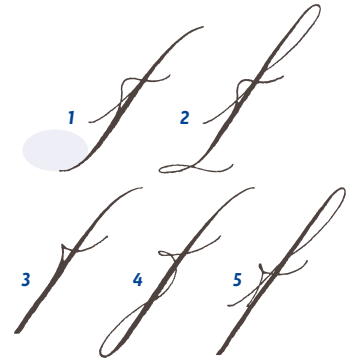
1) ステムからクロスストロークに向かって蛇行する線を、ここでは低すぎる位置から書き始めたので、幅が広くなり、よじれています。ステムからなめらかに左上に向かって書き始めましょう。2) 書き始めた位置が高すぎるので、この辺りがやや押しつぶれたように見えます。3) インクをつけたばかりのペンでステムを書くとき起こりやすいことです。多めのインクが紙に乗ったところで何本かの線が交差すると、そこにインク染みができやすくなります。書いたばかりのステムが乾くのを少し待つか、書き始める前に他の紙に1、2本のストロークを書いた後（ペン先のインクを減らしてから）、f を書き始めましょう。4) 特に下に向かって肉太すぎる f です。ステムの太さ（もしくは細さ）は、他のダウンストロークと均等でなければ、一文字だけ目立ちます。ダウンストロークがこれほど長い場合は、筆圧をかけすぎないように注意してください。これも単独で練習するとよいかもかもしれません。



f は2つ続くことが多いです。ff については次に説明しますが、いくつかの可能性がります。



深い練習 1) 書き終わりをカーブさせてみましょう。2) 横向きのループも選択肢のひとつです。楕円があると想像して形をつくってください。線がゆるやかに曲がる時は楕円に沿っているかのように書きましょう。もうすでにシンプルなフローリッシュです！ 3) 反対に、あっさりとアセンダーをカーブ（もしくは左で紹介したようにステムだけ）させて、落ち着いた雰囲気のシンプルなfにすることもできます。もしくはクロスストロークに、尖頭をつくることも可能です。4) クロスストロークのバリエーションとして、小さいループもあります。5) もしくは、ステムの左側から書き始めてストロークを短くすると、技術的には少し簡単で、モダンな雰囲気になります。



p.70のjの説明にディセンダーのバリエーションがあります。

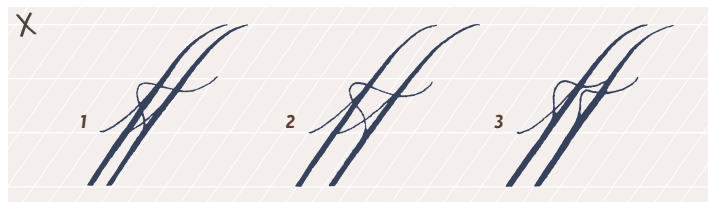
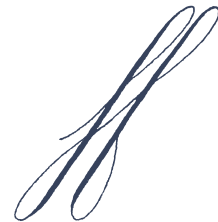
ダブルfー文字が2つ続くと可能性も増える

ほとんどの文字は見た目を変えずに2つ並べても目立ちません。しかしアセンダーとディセンダーがある文字が並ぶと、単語から浮き出て見えます。その中でもガイドラインの「3階」を使うfは特にそうです。能書家が複製本に同じ文字を2つ並べる手本として積極的に見せた文字のひとつでした。1) 最も簡単な形です。ループをつけないシンプルなfを書いています。同じfを並べるのは駄目というわけではありません！ この例の2つのfは控えめな感じがよいです。2) ディセンダーのループを左右に配置すると一際目立つ上、スペースを取ります。3) ここではアセンダーでシンプルなカーブとループ、ディセンダーでループとステムという組み合わせが入れ替わります。



練習ヒント 右のようにダブルや複数のループを単独で練習するのもよいです。fを並べる時は、このような課題があるでしょう。

1) 2つのfの間の距離はn幅です。ここでは狭すぎます。2) こちらはレタースペースが広すぎます。3) 同一の形を並べる際も、クロスストロークは、2本目のステムから枝分かれさせて、両方の文字を渡らせましょう。そちらのほうが別々のストロークよりも優雅に見えます！ *luff, tiff, fluffy* と練習してください。



深い練習 すべてのバリエーションを使ってダブルfを書いてみましょう。いくつかの組み合わせができましたか？ どれがよく見えて、どれがいまいちですか？ その理由も考えてみましょう。

かなり難易度が高い課題です。すでにアルファベットすべてを習得し、文字の組み合わせ方やスペーシングのルールを理解しているならば、上で考えた組み合わせを *sniffles* や *bafflingly* などの単語の中で試してみましょう。

深い練習 ラウンドハンドの手本に、とても魅力的な形の d があります (ゴシック・セクレタリー体の d に影響されています)。楕円のアップストロークのヘアラインを優美な楕円のカーブ状に、アセンダーが入る空間の左側まで伸ばしてください。ステムは曲線です。かなり洗練された要素ですが、大文字 D にも使えます。楕円から一気に伸ばす代わりに、まずは一旦楕円を書き終えてカーブを上から下へ書き加える手もありますが、カーブがつくりやすい反面、楕円につけることが難しくなります。



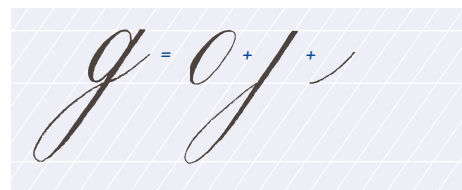
小文字 g

小さい楕円にディセンダー・ループをつけて、エギジットストロークで仕上げると完成です！

練習ヒント 左のページで説明した a の楕円にダウンストロークをつける際のヒントを思い出してください。小文字 y について p.71 で説明した問題にも直面するかもしれません。

練習に適している単語は、*gaga* や *gig* です。

深い練習 もしよければ、p.70 で説明した j のディセンダーのバリエーションを試してみるとよいでしょう。右は真面目な文書に使える非常にシンプルな g です。



小文字 q

q は a のように書き始めますが、アンダーターンの代わりに、ダウンストロークをディセンダーのスペースまで伸ばします。ステムから上に向かうヘアラインのエギジットストロークを書き加えて完成です。

練習ヒント ありがちな失敗が2つありますが、避けるのは簡単です。1) エギジットストロークを書き始める位置が低すぎます。2) こちらは高すぎます。ベースラインのすぐ下でステムから調和させて枝分かれするよう書きましょう。ダウンストロークの長さにも注意してください。p のディセンダーの比率について p.64 の説明を読み返しましょう。

練習に以下の単語、*quit*、*quaff*、*aqua* を書いてください。

深い練習 もっと手書きに近いバージョンもあります。p.64 のラウンドハンドに由来する p についての説明を読み返してください。



quid pro quo



小文字oとö

小文字oは非常にシンプルな文字です。小さな楕円に、bやvとは少し違って見える仰向きコンマを加えて書き終えます。その2文字と異なるのは、楕円を時計の文字盤として想像すると、仰向きコンマは1時半あたりの方向に配置され、エックスハイトの高さに十分に取まるといことです。

oにつく仰向きコンマは、左側がやや強めのカーブ(oのカウンターの中)で、右側では、楕円の輪郭に沿って書きます。oのウムラウトの点については、uのウムラウトの説明 p.59 を読み返しましょう！

練習ヒント 仰向きコンマの正確な位置が重要です。以下に注意しましょう。1) コンマをつける位置が低すぎます。こちらは高すぎます 2) 文字の比率に気をつけて見てみましょう。p.61 の 5) で説明したことを思い出してください。インクを引かずってヘアラインが台なしにならないように、一瞬ペンを上げるとよいです。

いつもどおり、まずは文字を単独で練習し、それから単語を書いてみましょう。ただし、今は終わりにoを使う単語だけにしてください。例えば、hello、kilo、liloです。



深い練習 1) 19世紀ドイツ人カリグラファーのイエーガーから、もっと自然な流れのoの書き方をお借りました。ベースラインのちょうど上から楕円を書き始め、上下のターンをやや狭めにし、書き始めのヘアラインの右側まで上がります。仰向きコンマで仕上げましょう。2) 18世紀のoは、右側が少し強調され(羽ペンだと可能)、次の文字へは単純にカーブした横線でつながられていました。非常に優雅で格式張って見えます。ポインティッドペンでは、右側を太くするためにリタッチするか、シェード(太い線)を左右、上から書いて後でつなげることもできます。



書く動作から自然にシェードができない線をリタッチすることは、頻繁に行われる上、妥当な方法です。でも状況にもよります。即興的な文字には向かない技法かもしれませんが、私はロゴや印刷するカードをデザインする際、すべての細部を最もよい状態にする目的で使います。

シェードをリタッチ 書く方向からはスウェルにならない場合、線に太さを加える方法です。1) ヘアラインを書きます。oの場合、アップストロークはヘアラインです。2) つくりたいシェードの太さに合わせて横にもう1本のヘアラインを書きましょう。3) 慎重に中の白い空間をインクで埋めてください。調節が可能になるオプションですが、時間がかかります。もうひとつの方法は、普通にoを書いたら紙を逆さにし、簡単にスウェルストロークをつくり、ヘアラインへとつなぐことができます。

小文字 c



c は、右側にティアドロップがついた半楕円 (e と同じ) でできています。逆を向いた仰向きコンマに似ています。最も優雅に見せるには、一気に書くのがよいです。エックスハイトラインのすぐ下にティアドロップを書きます。そこから反時計回りに楕円の上のターンに入ります。ここからは e とまったく同じです。先に左の半楕円から書き始め、最後に上からティアドロップをつける方法もあります。

練習ヒント この形が難しいと感じる場合は、ティアドロップとなるミニチュア楕円から外側にぐるっとまわって大きな楕円を書くことと想像してみてください。最初は単独で練習し、次は大きめに書いてみましょう。次のページにさらにヒントがあります！ それ以外の点は e と同じです。まずは単独、もしくは c が最後に来る単語を書いて練習しましょう。

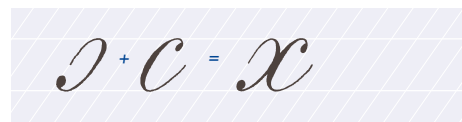
tic

一見単純に見える文字ですが、注意が必要です。細かいディテールですが、ティアドロップのバランスを取る必要があります。以下の失敗を避けてください。1) 雫の位置が低すぎます。2) その反対で、こちらは高すぎます。3) 茎についたさくらんぼになってもいけません！ p.79 の e についての説明、p.73 の k についての説明を読み返してください。



クラシックな小文字 x

x は 180 度回転した c に、通常の c がついた文字です。難関となるのは、2 つの楕円を調和させてバランスよく書くことと、2 つが正確な位置で合わさるように書くことです。最初はガイドシートが手助けしてくれます。



練習ヒント x は簡単な文字ではありません。以下に注意を払いましょう。1) 左半分と右半分が離れすぎています。互いがほんの少し触れるほどにしてください。2) ここでは重なっています。3) 右の楕円がヘアラインになっているので、文字のウエイトが明らかに足りません。4) こちらは両側がスウェルストロークなので、過剰なまでに強調される部分が出ています（全体的に太すぎます）。逆さの c はヘアライン、もしくは最低限のシェードをつけて書きます。5) 左の楕円が短すぎる上、下部が平らなので、ターミナルの位置が低く、ちょうどベースライン上に配置されています。

練習方法はいつも通りです。新しい形の逆向き c を単独で練習すると、うまく書きやすくなるでしょう。前章の楕円と渦巻きの練習課題もよい準備になります。時計回りの楕円を小さな渦巻きで書き終えるようなものです。ティアドロップをつける前にまず楕円をいくつか書くと（鉛筆でウォーミングアップしましょう）よいでしょう。x を含む単語はまだ書かないでください。



深い練習 1) 18 世紀複製本のほとんどは、下のティアドロップが上のものよりかなり大きく書かれています。すべての x について一貫してそのように書くと見栄えがよいです。2) もうひとつのバリエーションも 18 世紀からですが、一筆書きが可能です。ペンを上げずに 2 つの c をつなげることで、自然と 2 つのループができます。ウエイトの配分に気をつけてください。2 本目のダウンストロークのみがスウェルスです。基本的な x と同じく、左の半楕円の上だけを、ほんの少し太くすることができます。



深い練習 リガチャーを習得することと、その最適な使い方を理解するのはまた別です。大まかなルールも存在しません。h、l、kのシンプルな形は事実などが記載されている文章に向いている、フローリッシュのリガチャーが入るとラブレターが特に叙情的に見えるというような大雑把な指針以外は、ご自分の目的に合う（そしてそれを受け取る人にとって）最適な組み合わせを試してみるしかありません。リガチャーに無理がなく、書いている文字にじっくりくるように気をつけましょう（おそらく行間は広めのほうがよいです）。そして、多くの場合は「控えめなほうが効果的」です。

katharina

常に先を考えて書くようにしてください！ 続く文字のことを考えて書くとは、流暢に文字をつなぐことができます。考えずに書くと、文字のエギジットストロークが次の文字のエントリーストロークと合わないが増えます。

ついに文章を書く！

これで、すべての文字の組み合わせといくつかの単語を書きました。文章を書くには、さらに2つの要素、ワードスペースとラインスペースが関与します。

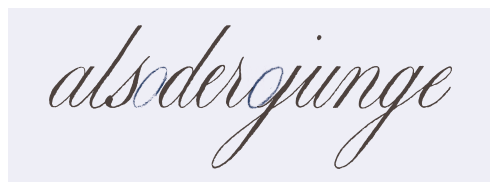
カッププレート体のワードスペースは、単語が明確に分かれるようにデザインする必要がありますが、縦のギャップや文章内の「小川」[川のように連なって見えるワードスペースのアキ]が見えることも避けます。前の文字のエギジットストロークと続く文字の最初のダウンストロークの間に小さな楕円がうまく配置できるなら、成功しています（n幅よりほんの少し広めです）。



ワードスペースが狭すぎます。



広すぎます！



ワードスペースを正確に空けるには、単語の間に紙から浮かせて、または鉛筆で薄く小さな楕円を書きます。前の単語からのインクを引きずって汚さないように気をつけましょう。鉛筆で書いた楕円は後で消します。

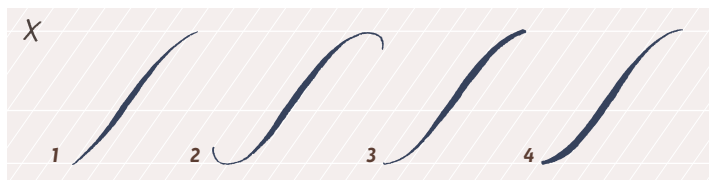


うまくいっているワードスペース

astrid
aStrid
estrid

フローリッシュの章（p.172から）では、さらにフローリッシュのリガチャーを自分でデザインする方法をご紹介します。

最も起こりやすい失敗です。1) 書き始めも終わりも傾斜が立っていたので、全体的に直線になっています。始めと終わりの線の向きは横になるように気をつけて、優雅なカーブにしましょう。2) 急な角度で書き始め、書き終わっているの、杖の持ち手のような形になっています。上と同じく横方向を意識しましょう。3) ステムの書き始めが濃すぎます。最初に筆圧をかけるのではなく、ヘアラインで書き始めてください。4) その反対です。カーブがベースラインに達する前にスウェルは終わってください。



Sカーブを2つの楕円の間にある空間と考えると、左の問題は回避しやすいでしょう。



Sカーブが単独であることはまれである 文字を形成するには、Sカーブを書き終えた際に（ヘアラインを下から書く方は書き始め）装飾を加える、もしくは他の線へとつながらないと、未完成に見えます。

3) シンプルで過度な装飾がない大文字の典型的な終筆は、ボール、もしくはティアドロップのターミナルです。書き方は、最後にキャピタルステムを柔らかい楕円状のカーブにつなげ、エックスハイトの半分ほど上がったら、楕円から外れ、ダウンストロークで少し筆圧をかけることでボールかティアドロップをつくります（仰向きコンマと同様）。

ヘアラインのSカーブを上から書く際も同じ書き方が可能です。そうでなければ、まず反時計回りの動きで一瞬筆圧をかけてボールをつくり（小文字bの時のように）、それ以降は下から上へ進みカーブを書き終えます。

4a) 他の方法は、キャピタルステムを渦巻きやカールで書き終えます。大きい弧を描くような動きの線です。ステムから時計回りに楕円の形を沿って動かし渦巻き状の線をつくります。ダウンストロークでほんの少し筆圧をかけると、自然に控えめなシェードができるでしょう。最後はステムに向かう繊細なヘアラインで書き終えます。

ヘアラインのSカーブの場合は、上から書くのであれば上とまったく同じように書き、ダウンストロークで筆圧をかけない方法があります。もしくは、下のカーブから書き始めてもよいですが、シェードになる部分が反対側になるので、カールの左が太くなります。

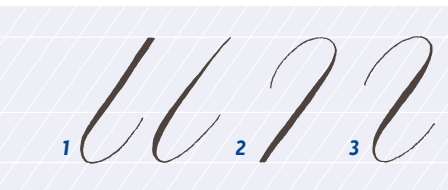
カールで書き終える大文字は、見出しや強調したい単語、段落の最初の文字に最適です。

4b) 長文の中には、大きくカールする文字は入れないようにアドバイスしています。あまりスペースを取らないように、らせん状の線が少ないシンプルなバージョンを使うとよいでしょう。



キャピタルステムの底部にも楕円があります！ 右はヘアラインのSカーブの書き方のひとつです。





すでに知り合いー アンダーターン、オーバーターン、コンパウンドカーブ

これらの3つの基本ストロークは問題ないと思います。書き方もアップストロークとダウンストロークが長くなりますが、小文字のものと変わりません。バランス的には、少し幅を狭くしなければ、文字が不格好になります。1) 大きいアンダーターンは、スクエア型かバリエーションとしてヘアラインで書き始めます。大文字にはどちらも使います。小文字を習得していれば、簡単に書くことができるでしょう。2) 大きいオーバーターンと3) コンパウンドカーブは、小文字を書く時に使うものとほとんど同じです。



Uにはコンパウンドカーブとオーバーターンが両方あります。

ヘアラインで書き始めるアンダーターンは、例えばAで使います。



オーバーターンでは、Nのバリエーションのみで使います。

練習ヒント 新しい腕の動きを試すチャンスです (p.104で説明)! 小文字の時よりもエントリーとエギジットストロークに勢いをつけることができます。

最も注意を払うべき点は、カーブが広くなりすぎないようにすることです。理想は、ガイドシートの幅2つ分を越さないこと。いくつかの文字では、さらに狭くする必要があります (個々の文字で説明します)。このストロークを書くのが難しい場合、もしくは大文字から始めてすべてが新しい場合はp.51の説明を読んでください。



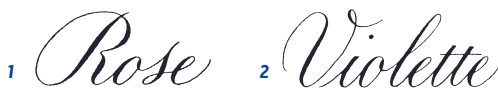
距離を置く

単語の書き始めを大文字にするのは、実はかなり簡単です。つなぎ方は、小文字の時と同じです。

1) エギジットストロークがベースラインからエックスハイトラインに向かうヘアラインの場合、同ストロークは次の文字のエントリーストロークになります (右にあるAのように)。

2) 他のストロークで書き終える文字 (例えば、右のEのように立った楕円) の場合は、次の文字まで少し距離を置きます。視覚的にはn幅ほどの空間です。無理につなげようとしないでください。小文字も同じでしたが、隙間が空いてもよいのです。

個々の文字に入ると、特例も含むたくさんの例をお見せします。





似た文字：N、M、V、W

大文字A

実際は幅の狭い三角形です。最もシンプルな形は、ティアドロップ、もしくはカールがついたヘアラインのキャピタルステムからオーバーターンへとつながります。

A1) シンプルなAの頂点は丸みがあります。一筆で書くことが可能です(クロスバー以外)。基本形のクロスバーは両方とも、Aを視覚的に2つに割るまっすぐ横方向に進むヘアラインです。

A2) 尖った頂点とカールのバージョンのほうが好きなら、ダウンストロークに入る前にペンを一旦上げます。クロスバーはやや長く、文字を交差してもよいです。

練習ヒント 文字の幅が広くならないように気をつけましょう。基本ストロークの練習をし、傾斜を保ちながら書くと、広くならないはずですが、注意点は以下の通りです。1) こちらは、単語を書く際に次の文字に直接つながることができます。2) この場合は、少し空間を空けて次の文字を書きます。



ローマンキャピタルのAを観察しましょう。もともと平筆で書かれていた文字なので、右側のステムが太くなります。私たちが書こうとしているのは、このクラシックなAから発展した形状です。

以下の失敗をしないように注意してください。1) 幅が広すぎます。2) こちらは狭すぎます。バランスを確認するためにp.106のキャピタルステムのチェーンを再度ご覧ください。3) クロスバーの位置が高すぎるので、上の部分が小さく見えます。4) こちらは低すぎるので上の部分が大きくなり、文字のバランスが悪いです。クロスバーは視覚的な中央に引きましょう(上を参照)。5) ヘアラインのキャピタルステムは、書きやすいのであれば上から下に書いてもよいのですが、スウェルストロークにはならないように気をつけてください。バランスが悪くなります。ヘアラインのダウンストロークなので、筆圧をかけてはいけません(左を参照)。



深い練習 - バリエーション

A3) シンプルなバリエーションは、小文字のaに基づいた形です。基本の楕円にアンダーターンをつけます。大きい楕円のバランスに特に注意を払いましょう。この形と大きいアンダーターンについて読み返すとよいかもしれません(p.109と110)。歴史的資料の中ではこの形状はまれですが、シンプルな形なので長文や小さい文字を書く際に適しています。



似た文字：C、E、G、O、Q

深い練習 - バリエーション

B3) キャピタルステムはとてもシンプルなものから装飾的なものまで、バリエーションがいくつかあります。これは歴史的資料からの基本の形のバリエーションで、短いエントリーストロークからヘアラインで始まるダウンストロークです。2つのボウルは、ステムから流れ出て優雅にターンします。ボウルは数字の3に少し似たバリエーションです。ボウルをループの代わりに尖頭でつなげ、ボール・ターミナルで書き終わります。横向きの楕円からBを書き始めることも可能です。

B4) 一筆で書くことができるシンプルな形です。キャピタルステムの下でターンを傾斜に沿って楕円へとつなぎ、ステムを交差したら下に向かい、尖頭でつなげるボウルを書きます。ステムの左側の大きい楕円は、しなやかで生き生きとした線を書き、バランスにも気をつけましょう。それには練習が必要です。ボウルを書き始める前に、楕円の頂点まで来たら外向きの小さなループを加えることもできます。**B3**と**B4**は、小さい文字の長文に適切です。

B5) ステムを細長い横向きのループで書き終わっています。そのループがあるので空間が少し狭くなるため、ターミナルにはティアドロップが合います。2本の線が触れないようにしましょう。

B6) こちらの素敵なバージョンもお試してください。ベースラインで架空の横たわる楕円に沿った線でステムを交差したら、またステムに向かって上に進みます。横たわるプレッツェル・スワッシュです。ステムの右のボウルを少し広めにする事で、プレッツェルと重なるのを防ぎます (p.115の**A6**を参照)。

B7) エントリーストロークのデザインは、ぶら下がるループです。Aと同じようにキャピタルステムをプレッツェルで書き終えることもできます。上から書き始めるので、**A6**と比べるとシェードの位置が反対側になります。

B8) シンプルな形でもBはもともと楕円やカールが豊富ですが、エントリーストロークをプレッツェル型にすると、よりバロック調の雰囲気になります。かなり上の方から書き始めましょう。2つのボウルを書く余裕があるので、エントリーストロークは文字本体より上から書き始めます。

B9) **B3**をより手書きの筆記体に近く書くバージョンです。スペースも取らない上、一筆で書くことができます！

B10) **B4**を基本にしていますが、かなり凝って見えます。ステムの右側からエントリーストロークを始め、左には楕円の中に大きな内向きのループを書きましょう。フローリッシュの章 (p.174)には、このような大きいスワッシュの書き方のコツをご紹介します。



大文字C

小文字と同じく、基本の形は半楕円です。多くのバリエーションをつくりにくい非常にシンプルな文字です。

C1 文字の高さの5分の4あたりから、外側に渦巻くシンプルなエントリーストロークで書き始めましょう。そして、大きい楕円の左半分をスウェルストロークで書きます。最後は、少し右に向かったヘアラインで書き終えますが、それが次の文字のエントリーストロークになります。

C2 もしくは、横たわる楕円（ベースラインと平行）の形がエントリーストロークになります。キャピタルライン（大文字の上端）から始まるヘアラインには、極細のシェードをつけます。楕円を書き進め、右側で楕円の半分より少し上まで来たら、柔らかく優雅な線でターンし、ベースラインに向かいます。常に隠れた楕円の形を頭に描きながら進め、最後のエギジットストロークは徐々に細めて書き終えます。このエギジットストロークのことを「ぶら下がる楕円」と呼んでいます。

練習ヒント 非常にシンプルな文字なので、すべてのストロークが正確でなくてはなりません。大きい楕円をまだ練習していない方は、今がよい機会です（p.109の説明を参照）。単語の書き方は、通常どおり2つ方法があります。シンプルな**C1**は、スペースの節約になります。下部にぶら下がる楕円がついたバージョンは、スペースを確保することにより文字の形ははっきりと見えます。

1 Chang 2 Christopher

準備練習をしていれば、最初のCは難しくありません。以下は横たわる楕円から書き始めるバージョンで考慮すべき3点です。1) 横たわる楕円のシェードが太すぎる上、書き終える位置も低すぎます。結果、「ホットスポット」と呼ばれる太い線が重なる場所ができています。主なシェードにインクをひきずりこむ可能性もあり、不格好なインクの塊ができてしまいがちです。2) 横たわる楕円が大きすぎるので、頭でっかちの文字になります（楕円の軸も斜めになっているので、ベースラインと平行にしてください）。可読性と曖昧さも問題です。Cに大きすぎる楕円とエギジットストロークがあると、Oに似てしまいます。3) このエントリーストロークの楕円は小さすぎます。先ほども同じですが、書き始めのスワッシュと下のぶらさがる楕円が釣り合いません。線が閉じていなくても、中の白い空間をよく見ましょう。理想では、上と下の楕円は同じサイズのはずです（左も参照）。



上下のスワッシュの中に「隠れた」楕円は比例した大きさにします。



深い練習 - バリエーション

F3) B5と同じシステムのバリエーションです。左側に十分スペースがあるので、トップストロークにカールをつける余裕があります。

F4) エギジットストロークをプレッツェルにするのであれば、クロスストロークへつなげることが可能です。その他の点では、p.117の**B7**とまったく同じです。トップストロークはシンプルにしています。

F5) F1のバリエーションですが、キャピタルステムから横たわる楕円形の線にミニループを書き加え、ステムと交差させることで、クロスストロークとしてつなげています。

F6) キャピタルステムの線をベースラインまで伸ばし大きなループを書きます。このスワッシュは18世紀によく使われました。適度の大きさだと、この形状は長文にも合いますが、ループが小さすぎると可読性に問題が起きます。ループのシェードもキャピタルステムより控えめにしましょう。

F7) Aと同じく、クロスストロークの形を変えることもできます。ステムからわずかにカーブさせた線を書き出し（アンダーターンを書こうかとしているような動き）、ティアドロップかボール・ターミナルをつけましょう。シンプルかつエレガントです！ターミナルをヘアラインで始めて平らに書き終える短いくさび型にすると、クロスストロークが厳格な雰囲気になります（F4参照）。

F8) トップストロークを変えることもできます。傾斜に沿ったふら下がったループから始めます（p.117の**B7**のように）。トップストロークと合わせて、波状のクロスストロークをデザインしました。Tのページでトップストロークのバリエーションをさらにお見せします（p.148）。**B8**も参考にしてください。すべてFに使えます。

F9) 最後は歴史的バリエーションです。読みづらいかもしれませんが、私は魅力的だと思います。このFは小文字fと同じように書き始めます。エックスハイトの上のほうからアセンダーループを書き始め、シンプルなカールで書き終えるキャピタルステムを書きます。コンマの形をしたクロスストロークがよく似合います。

F10) D8に似ていますが、ステムの右側から書き始める横たわる楕円がキャピタルステムと合流します。キャピタルステムにはボール・ターミナルをつけましょう（カールでもよいです）。クロスストロークをつけることでFになります。この形を見ると縦に長いfと通常のfの歴史的なつながりがわかります。

F3



F4



F5



F6



F7



F8



F9



F10



大文字 G

G は C カーブにさらなるカーブやループがついて成り立っています。

G1 最初の基本形は、まず C よりやや短めの C カーブを書きます。高さは、キャピタルハイトからエックスハイト 3 分の 1 ほどです。そしてエックスハイトのすぐ上から始まる下向きのループを書き加えます (p.54 参照)。この G は、大文字でも珍しくディセンドラーがあります。上の C カーブの重さを支えるので、小文字に比べてループの幅が広く、カーブも強めのディセンドラーです。

G2 2 つめはディセンドラーがないバージョンです。ローマンキャピタルの縦線は、短い S カーブに変形しました。C カーブを横たわる楕円から書き始め、エックスハイトのすぐ下あたりで書き終わります。一旦ペンを上げて、ペン先を少し右に移動し、そこから短い S カーブを書いてください。ベースラインの上に配置し、ボール・ターミナルで書き終わります。

練習ヒント ご想像どおり、ここでも 2 つの要素を調和させたバランスが重要です。大文字 C と小文字 j、そしてキャピタルステムを練習していたら、難しいはずですが。最初のバージョンは、左のようにつなげてチェーンにしてみてください。すぐよい流れをつかめるようになるでしょう。

これまでと同じく、単語を書く際の選択肢は、次の文字へつなぐヘアラインがあるかどうかで 2 つあります。



文字や要素をチェーンとして書くと、筋肉に記憶させるために、とてもよい練習になります。大文字はつなげやすいでしょう。フローリッシュの練習にも効果的があります。

1 *Gautama* 2 *Greta*

遭遇するかもしれない問題点をまとめました。1) ディセンドラーのループの幅が狭すぎます。スペースに余裕がありデザインの目的に合っているのなら、上の手本より大きくしてもよいですが、バランスが崩れるので小さくはしないでください。2) C カーブが大きすぎて、ベースラインに乗っています。2本の線が触れてしまいそうな上、ループが小さく見えます。3) キャピタルステムが左に寄りすぎて尖頭部分で2本の線が重なり、見栄えがよくありません。4) キャピタルステムが右に寄りすぎです。2つの要素の間に隙間ができ、文字自体の幅が広がります。5) キャピタルステムが小さいので、上のパーツとのバランスが崩れています。



深い練習 - バリエーション

G3 ディセンダーのバリエーションが魅力的です。これは **G2** と同じように書き始めます。Cカーブを少し短くし、次に時計回りに豊かなカーブを弧状につくり、カールで書き終わらしましょう。

G4 プレッツェルの再登場です。ここではディセンダーに使用しますが、少し豊満に書くと美しく見えます。

G5 今まで次の文字につなげてきたループをダウンストロークの右に優雅にカールさせ、徐々に細くします。基本形の G1 や G2 と比較すると、このバリエーションは少し幅が狭めです。続く文字のことを考えて書いてください。近くにディセンダーがある文字が来る場合は、このスワッシュで書き終えるのは避けたほうがよいでしょう。

G6 ディセンダーがない一階建ての G の異なるバージョンは、キャピタルシステムを細長い横たわるループで書き終わります。これで、しっかりとした土台のある文字になります。エッジストロークを次の文字へつなぐのに使しましょう。

G7 書きやすいシンプルなバージョンです。ループはなく、ディセンダーラインまでしっかり下がるダウンストロークが柔らかくターンし、ダウンストロークに平行に上がり、次の文字へとつながります (p.64にある小文字 p のラウンドハンドのバリエーションを参照)。

G8 C と E でご覧になった C カーブのエントリーストロークを変える様々な方法は、G でも使うことができます。つまり、p.119 の **C3** の小文字 c と同じエントリーストローク、**C4** のシンプルなアップストローク、追加のループがないプレッツェル型 (**C5**, **C6**) です。さらに選択肢をお望みならば、以下のバリエーションをお試しください。アセンダーの範囲に反時計回りで外側に向く渦巻きカーブを書き、小さなループをつかってキャピタルハイトまで上がったなら C カーブを書き始めます。最初に書いた渦巻きを交差する際は、カウンタースペースのバランスに注意してください。潜む楕円形や平行線を常に意識すると、このような複雑な形も練習すれば書くことができます (p.172 から始まるフローリッシュの章も参照)。ここではディセンダーは少しゆるく、尖らすのではなくループにしましょう。



G3



G4



G5



G6



G7



G8



フローリッシュつきのエントリーストロークの中にある平行線や楕円

大文字 J

J1 最初の基本の形は、標準的なエントリーストロークで書き始めます。そこからキャピタルステムと大文字のディセンドラー・ループへと長いストロークが続きます (p.126 の **G1** のように)。

J2 ぶら下がる楕円がステムの周りをカール (p.131 の **B3** 参照) します。他は **J1** と同じです。

練習ヒント J のキャピタルステムは傾斜が若干立ち気味で、ディセンドラーのない通常のキャピタルステムより少し湾曲してもよいです。J の寸法は、キャピタルステムがアセンダーとディセンドラーの高さをすべて使う長さです。そうでなければ文字が傾いてしまいます。また、ループは狭すぎるよりも少し幅が広めのほうが (G より少し大きめ)、しっかりとした文字の土台になります。単語の書き方は **G1** の時と同じです。



似た文字：G、I、T



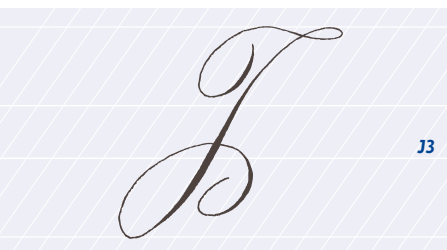
Jaemin

よろめいた J は、このように見えます。1) キャピタルステムを傾斜上 (他の文字なら正確な書き方) に書くと、右に傾きます。2) ループの幅が狭すぎます。文字の支えにするには、もう少しおおらかなループにしましょう。1) も 2) も上の練習ヒントを読み返してください。

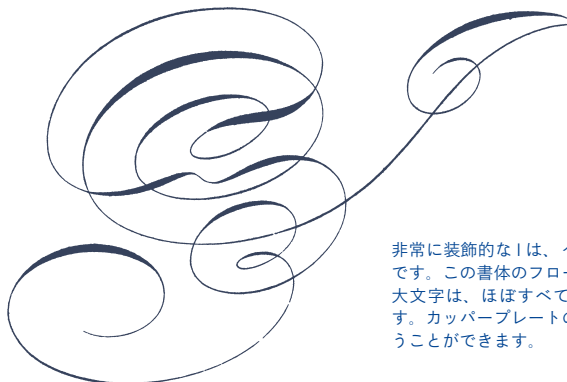
深い練習 - バリエーション

I と同じく、H で使ったエントリーストロークのバリエーション (p.129 参照) をすべて使うことができます。I の説明でほとんどお見せしましたが (p.131)、例として、以下のバージョンをお見せします。

J3 p.131 の **I5** と同じエントリーストロークです。ループはシンプルなカールで書き終わります。G と同じく、ループにはいくつかのバリエーションがあります。p.127 のものを参考にしてください。



歴史的に、I と J はあまり区別されていませんでした。そのため、I で使う形は J で使うことができます。右下は素晴らしい例です！



非常に装飾的な I は、イタリアン体のものです。この書体のフローリッシュがついた大文字は、ほぼすべてのシェードが逆です。カッパープレートの小文字とともに使うことができます。

大文字 K

K1 KはH(p.128)に近縁の文字です。基本の形は、右のキャピタルステムにカールブラケットがつきます。この形は小文字k(p.63参照)でお馴染みです。**H1**と同じように書き進め、上のループを書いた後に、ここでは尖頭をつけていますがカールブラケットを書きます。

K2 2つめの基本の形は**H2**のように書き始めます。ブラケットは別に書き始めましょう。キャピタルハイトのすぐ下の位置で右上のティアドロップから始めます。ここでは、ブラケットの2つパーツをつなげるため、尖頭の代わりにミニループを使います。

練習ヒント Hを習得していれば、Kはどうってことはありません！ 小文字kのカールブラケットとは少し違いますが、おおむねお馴染みのストロークです。これも単独でチェーンとして書く練習をするとよいでしょう。単語の書き方に関しては、Hの例を参考にしてください。

失敗の可能性は以下の通りです。**1)** 2本のダウンストロークをつなげるヘアラインが右のダウンストロークの低すぎる位置に到着し、ブラケットと衝突しています。ステムが交差する場所はHよりも少し上にしましょう。上のループを小さくすることでブラケットのウエストの場所をつくります。これにより、小さいループでも視覚的にバランスが取れます。**2)** カールブラケットの位置が左すぎます。小さいループはステムから突き出し、ステムとカールブラケットのカウンターが小さくなるので、文字全体の幅が狭いです。ターミナルの見栄えにも気をつけましょう（これは大きすぎて、軸が違います）。ここでも、空中で「書きながら」反対側にペンを移すと、ブラケットを書き始める位置がわかります（Hのヒントを参照）。**3)** 基本の形両方に通じることですが、Kの脚が右に出すぎると、大きすぎるカウンターが生まれます。小文字のkと同様、ブラケットは傾斜に沿うように書きましょう。

深い練習 - バリエーション

K3 Hに使えるステムのバリエーションは(p.129参照)、ほとんどKでもうまくいきます。2つの文字は似ているので、ここでは2つだけ例をご紹介します。このKは、左にとっても小さいループをつけましたが、**H3**のバリエーションと同じです。

K4 **H4**の左側と**H2**のエントリーストロークを組み合わせ、ブラケットを加えました。



似た文字：HとX



カールブラケットをチェーンで練習します。



歴史の手本では、Kの脚がやや速くに出て
いる文字もあります。こちらが好みでしたら、使ってください！





Q1



Q2

似た文字:L、X、Z、O (Q2のみ)

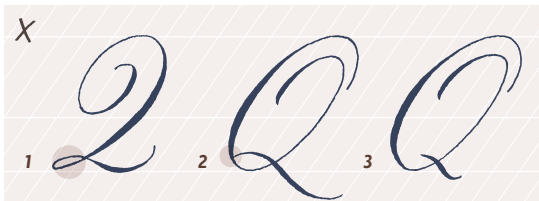
ドイツ語で最も使われぬ文字の第一位はQです(次はXとY)。Quince Jelly(クインズ・ジェリー)のロゴを依頼されたとしたら役立ちます。デザイン的にはとても素敵な文字です。

大文字Q

Q1 数字の2に似ている歴史的なQは見慣れない形ですが、通常は文脈でQだとわかるはずなので、必ずしも問題とは思いません。大抵の場合、可読性や早く理解することが最優先の長文には使われません。まず中から外に向けた反時計回りの渦巻きを傾斜に沿って書きます。ベースラインに向かいながら左寄りのループをつくり、ダウンストロークの右側へ向かう波状の線で書き終わります(Lのように)。

Q2 こちらは19世紀以降に使われ始めました。Oを書き、2本目のストロークがテールとなり、ベースラインの下に向かいながら先細になる波状の線です。

練習ヒント **Q1**には時計回りの楕円を練習するとよいかもしれません(p.109の珍しい基本の形を参照)。**Q2**は、Oに関するすべてを応用できます(p.140参照)。波状のテールは、ヘアラインでも、わずかにシェードにしてもよいです。その場合は、紙を回転させるか(ストレートペンを使っているなら不要)リタッチ(p.78参照)するとよいでしょう。**1)** 通常どおり、少し空間を空けてください。**2)** **Q2**のテールは次の文字より下のディセンダーの位置で書き終わります。次の文字にディセンダーがある場合は注意しましょう(通常はuか他の母音が続くので可能性は低いです)。



最も起こりやすい失敗は以下の通り：**1)** ループが小さすぎるので、十分な文字の支えになっていません。**2)** テールを書き始める位置が大きい楕円に触れています。明確に間隔を置くか、楕円のかなり左から書き始めましょう。**3)** テールが小さすぎて、意味のないストロークを思いつきで入れたように見えます。

深い練習 - バリエーション

Q3 最初の基本形は、エントリーストロークとテールを変えることができます。例えば以下のようにです。ぶら下がるループから始めますが、文字全体が小さくならないようにキャピタルハイトより少し上まで伸ばします。下のループをQ1より少し大きめに書き、波状の線ではなく、極小のループからアップストロークにつなげ、書き終わります(p.134の**L2**に似ています)。

Q4 エントリーストロークは単純ですが、テールはベースラインよりさらに右下に下り、かなり大きい横たわる楕円で書き終わります。Oのバリエーションの多くはQ2に当てはめることができるので、是非試してください！



Q3



Q4

大文字R

R1 ボウルを書き終えるまでは、**P1** (p.142 参照) と同じ書き方です。そこからはキャピタルステムに触れそうな位置 (触れなくていいです) に尖頭をつくり、レッグはアンダーターンで書き終えましょう。この形はKに似ていません (p.133 を参照)。

R2 **B2** (p.116 参照) と同じスタートを切ります。書き終わりは上のアンダーターンの代わりに、ぶら下がる楕円です。いつも通り、普通のアンダーターンはさらに装飾的なストロークに変えることができます。

練習ヒント 尖頭やミニループからアンダーターンへのつながりは、小文字の r (p.66 参照) のショルダーと同じように考えてください。それ以外は、B と P の要素や K のレッグについての説明が通用します。単語の書き方は、お馴染みの 2 つの選択肢です。1) 直接つなげるか 2) スペースを空けるかです。



似た文字 : B、K、P

1 *Roshanara* 2 *Raphael*

R の書き方に問題を感じるか何かが不明確な場合は、似た文字の説明を読み返してください。起きやすい問題について詳しく説明してあります。

深い練習 - バリエーション

原則的に、P にレッグをつけることで、シンプルなものから複雑なものまで、B と P に可能なすべてのバリエーションを作成できます。珍しいバリエーションをひとつ説明しますが、他はご自分で書くことができるでしょう。

R3 **P8** (p.143 参照) にレッグをつけると、この R になります。アンダーターンをつなげる線は、ボウルからなめらかに枝分かれしてください。スペースに余裕があるなら、p.117 の **B10** で説明した右側のスワッシュから書き始めるキャピタルステムはこのような華やかな文字にぴったりです。



近道は可能です! トレーシングペーパーと鉛筆を使って、似た文字を合わせることで、文字のバリエーションの全体を素早くつくります。P と B をトレースし、レッグをつけると R になります。気に入ったものをペンとインクで練習しましょう。



大文字 W

W は V に非常に似ています。基本的には V が 2 つ密着しているだけなので、ご存知なことばかりだと思います！

W1) たっぷりとした楕円のアップストロークで始め、アンダーターンを書きます。次のストロークとうまくつなげるには、最低でもエックスハイトまで上がりましょう。次にキャピタルハイトのすぐ下からもうひとつアンダーターンを書きます。キャピタルハイトでミニループから波状の線でエグジットします（もうひとつの書き方は、V1 のようなカールで書き始め、最後のループを大きくします）。

W2) シンプルなアップストロークから、**V2** (p.150) と同じ形を 2 回書いてください。文字全体の幅が広くなりすぎないように、アップストロークの傾斜を少し倒し（60 度くらい）、V のカウンターよりやや狭くしましょう。

練習ヒント U と V を書き終えていたら、W は問題ありません！ M と同じく、アップとダウンストロークがたがいに平行になるように気をつけましょう。いつもどおり、単語を書く時は、大文字と次の文字の間にレタースペースを空けてください。

Valentyna



注意点：この W では、アンダーターンの幅が 2 つとも広すぎます。基本のアンダーターンより少し狭く書くと、幅が広すぎない優雅な W になります。

深い練習 - バリエーション

W3) V と同じく、文字の要素を変えると様々な W を書くことができます。この W は外観が **V3** に対応する形です。

W4) 魅力あふれるバージョンは、尖頭の部分をすべてループに変えています。エントリーストロークの渦巻きは、傾斜沿いにあります。理論上は、一筆で書けますが、どこかで止まりたい場合は、ループで交差する場所がよいでしょう。

W5) シンプルなカーブしたアップストローク、もしくは **V5** (p.151) のように始めます。ダウンストロークも V5 のように書きますが、続くアップストロークはキャピタルハイトまでほぼ直線のヘアラインです。書き終えるアップストロークは少し右にカーブし、控えめなティアドロップ・ターミナルをつけます。



似た文字：U と V、もしくは A、N、M、V



W3



W4



W5

大文字X

実際 X で始まる名詞は珍しいので、英語で最もまれに使われる文字だと思われていますが、3つのバージョンをご紹介します。この先、宛先に Xavier (ザビエル) と入っている封筒を書くことがあるなら、この大文字も習得していただくかと思っただけのではありません！

X1 QI の楕円と **H1** の右側と (p.144 と p.128 を参照) 組み合わせています。2つの要素がたがいを触れるように書いてください。

X2 文字の左側をボール・ターミナルをつけて書きます。そして上にティダドロップをつけて、細めの C カーブを書いてください。小文字 x を大きくしたバージョンで (全体的には少し幅が狭いです)、フォーマルな雰囲気があります。

練習ヒント 特にシェードの細かいバランスに注意を払ってください。クロスバーがつながっているように見えます (右のスケッチを参照)。左の楕円は上部を強調し、C カーブは下部にシェードをつけます。**X2** は以下のようにも書くことができます。

キャピタルハイトからベースラインまで湾曲したスウェルストロークを書いたら、上に向かってターンをし、エクスハイトのすぐ下まで続けます (拡大したコンパウンドカーブのようですが、傾斜を立てないと文字が傾きます)。2本目のストロークは、右上から左下までのヘアラインにボール・ターミナルをつけてください。

X1 の2つのループは視覚的なバランスを取る必要があるため、上のループは下より少し小さくします。p.128 の H についてのヒントを読み返すとよいかもしれません。

単語を書く際は、H と同じくエギジットストロークに合わせます。X で間違いが起きそうなことを右でお見せします。**1)** ストロークの強調のつけ方の結果、右上から左下につながった太い線に見えます。つまり S カーブです。**2)** 2本のダウンストロークの中央が最も太いスウェルになっているので、X の中央が重たすぎます。通常より2倍の太さのステムが通っているように見えます。両方とも上のヒントを参考に解決してください。

深い練習 - バリエーション

バリエーションをつくるには、p.128 と p.133 の H と K で使った要素を使うことができます。

X3 かなり珍しい筆記体のバージョンです。2つのカーブを絡ませることで、中心のカウンターが面白くなり、文字にスピード感が生まれます！



似た文字：H と Q



X の斜線から由来した線



筆順のひとつ



Zの比率やウェイトを理解するには、通常は練習が必要です。以下の点に注目してください。1) このZには、スウェルも強調されている箇所もないので、全体的に軽く見えます。リタッチや紙を回転することが嫌ならば、下のシェードを変えてZの特徴を保つ方法を参考にしてください。2) 波状の線が2本とも短すぎると、文字全体が傾きます。特に下の線はある程度の長さがないと、文字の支えになりません。エントリーストロークのほうが自由にデザインできます(下のバリエーションを参照)。3) このZの斜線は傾斜沿いに書かれているので、不思議な形のLに見えます。前ページのZの角度について読み返してください。



深い練習 - バリエーション

Z3) 19世紀からのZ2のバリエーションは、時計回りの楕円形と大文字のディセンドャー・ループで成り立っています。基本の構造は、小文字z (p.71)に基づいています。



Z4) このモダンなバージョンは、ジグザグではなく斜線が強調されます。こちらのほう書きやすいです。ボール・ターミナルからキャピタルライン沿いに波状のヘアラインを書きます。右上から左下までスウェルストロークを斜めに書いてください。書き始めと終わりを細いヘアラインにすると文字が優雅に見えます。ベースラインで一旦ペンを上げ、ベースライン上に波状の線を書き、上と同じく横向きの楕円で書き終わってください。中央の短いクロスストロークをつけるかどうか選んでください。



Z5) エントリーとエグジットストロークを横線の代わりに強めにカーブした線にしていますが(ぶら下がる楕円を加えたコンパウンドカーブに少し似ています)、中のダウンストロークはペン先をどう操作するか悩まなくても有機的に書くことが可能です。極小のループからヘアラインになるクロスストロークは、文字を生き生きと見せています。



Z6) 興味深いバリエーションは、ディセンドャーがない圧縮された手書き風のZです。ほんの少し湾曲したアップストロークをベースラインからキャピタルラインまで書き、Z2のように2つのループをつくります。2つめのループの書き終わりの線を文字の高さ中間あたりにつくる小さいループへとつないでください。そこから大きい横たわる楕円形にベースラインの下まで線をつなげ、ベースラインでカールすると優雅に書き終わります。

